

いすずめの里だより

第6号
空いて、草むらいつわんさかー秋の虫

この暑さが永遠に続くのでは…と思えてくる今日この頃。早朝や夕暮れ時、気まぐれのように涼やかな風がさっと吹くと、この上なく幸せな気分になります。そして秋の訪れを感じさせる虫たちが現れると、いすずつ季節は移ろいでいるのだと気づかされます。

秋の空を飛び回るイメージがあるトンボは、実は初夏から活動しています。ゴールデンウィーク頃から見られるものはサナエトンボ。サナエとは若い稲（早苗）のことで、田植えをする頃に見られるトンボという意味です。日本最大級はオニヤンマ。黄色と黒の縞々模様を、トラ柄の鬼のパンツに見立てたとか。こちららも梅雨頃から見られます。そして気温が下がるのを待って現れるのはアキアカネ。いわゆる赤とんぼです。気温が高いと体温が上昇して死んでしまうため、夏は高地で過ごし、気温が30度をこえなくなると平地に下りてきます。

寝苦しい熱帯夜のピークが過ぎる頃、心地よい子守唄を奏でる「オオロギたち」。最も身近に見られる「オオロギ」「リーリー」と鳴くツツシサセ「オオギヤ」「コロコロ」と鳴くエンマ「オオロギ」がいますが、意外と正式名称は知られていませんね。「スイッチョン」と鳴くウマオイや、鳴き声の美しさでよく知られる「リーン」となくスズムシなど、これらは草むらなどの地面に近いところで生活していますが、「リーリー」といううるさいほどに力強い声の持ち主アオマツムシは木の上で生活しており、繁殖力が強いため都心の街路樹からも聞こえてきます。

時代の移り変わりとともにあまり聞かれなくなった虫、より身近になった虫と様々ですが、今年はいくつ見つけられるかな？

「オオロギの鳴き方は三種類あり。オス同士が縄張り争いのケンカの際の争い鳴きと、自分の居場所をメスに知らせる本鳴きと、近寄ったメスに求愛をする諍い鳴きとがある。ちなみに鳴くとは言っても口から声を出すのとは全く翅をこすり合わせこ音を出す。いわば羽音である。」



トンボは幼虫期を水中ですごし、羽化をするとエサが豊富な林や草原へ行く。繁殖可能になるとオスは水辺に戻って縄張りをもち、メスが訪れるのを待ちわびる。ちなみにトンボの幼虫はヤゴと言われ、天敵から逃げる時、ひらひらと、ビョービョーと水流をたぐって逃げ回る技がある。